

第V章 総 括

1 遺跡の変遷（第23図）

縄文時代の遺物としては、SD2・SD8から縄文土器鉢の底部破片1点と叩石1点が出土したが、遺構の時期とは異なり、流れ込みと考えられる。県の試掘調査でも当遺跡の範囲内で晩期の土器と石鋸形石器・叩石が見つかっているが、当該期の遺構は確認されていない。

古代の遺構はA地区の溝と自然流路である。溝より古い土坑もあるが、時期や性格は不明である。SD2・SD3・SD8は同一の溝と推測され、断面形や規模から人為的に開削されたものと考えられる。これらの溝からは、9世紀後半を中心とした須恵器・土師器が多数出土しており、土師器椀・皿は図示した18点中5点に赤彩が認められ、そのうち1点の大型椀に「連」の墨書がある。須恵器は器種が多様で、杯の他に壺・甕・横瓶・鉄鉢がある。このような出土遺物の様相から、周辺に識字層を含む有力者の居館あるいは官衙的な施設があったことが想定される。また、鉄鉢は仮具であり、寺院との関連が窺える。

中世の遺構はA地区の自然流路NR7のみで、石割川の旧河道の一部と考えられる。古代のSD3・SD8を切っていることから、出土した須恵器・土師器は、元来これらの溝に伴っていたものと考えられ、南側の落ち際に投棄された石臼や、その付近の表土から出土した15世紀後半頃の中世土師器がNR7の年代の一端を示していると考えられる。

近世以降の遺構はB地区で検出した。溝は幅約0.5～1.6m、深さ約0.1～0.4mと小規模で、方向は様々で性格も不明であるが、SD12については、北側の延長線上に県の試掘調査で水田4区画分にわたって同様の埋土の溝が確認されており、一連の人為的な溝と考えられる。B地区の溝については出土遺物がないため時期は確証を得ないが、近世以降の遺構としておく。井戸は1基で、明治5年頃より発売された「神薬」のガラス瓶が出土しており、近代まで使用されていた井戸と考えられる。落ち込みは、昭和30年代の圃場整備以前の、小区画水田であった頃の農地に関わる遺構と考えられる。

2 「連」墨書土器（第15図・第8表）

古代の墨書土器は「連」と墨書された土師器椀（23）のみであるが、大型で赤彩されており、特別な用途に用いられたと考えられる。「連」の墨書土器は全国的にみてもさほど多くない。1字のものが多数を占めるが、「弓削連」「狛連」「物部連」のように氏族の名が前に付くものもある（第8表）。後者の場合は、684年制定の八色の姓のひとつ、連を指すことが確実であろう。前者の場合も、連を賜姓された地方豪族に関わる可能性があるが、遺跡の性格に関わる問題でもあり、当遺跡の「連」墨書出土の意義は、周辺遺跡も含め今後の調査の進展を待つて再考したい。

第8表 「連」墨書土器出土例

遺跡名	所在地	時期	種類	器種	記文	点数
秋田城跡	秋田市	9C後半	赤焼土器	杯	□(連カ連カ)	1
手取清水遺跡	横手市	9C中-後半	須恵	杯	連	1
城神廻り遺跡	羽後町	9C後半	須恵	杯	連	1
興屋川原遺跡	鶴岡市	平安時代	土師	杯	連カ	1
新青渡遺跡	酒田市		赤焼土器	杯	連・連カ	4
上高田遺跡	遊佐町		須恵	杯	連・弓削連	2
石岡市内	石岡市		土師	杯	工・狛連	1
神野向遺跡VI	鹿嶋市		土師	皿	連カ	1
半田中原・南原遺跡	渋川市		須恵	杯	連	1
八木連荒畠遺跡	富岡市		須恵・土師	杯・椀	連・□(連)	5
武藏國府閑連遺跡	府中市	9C前半	須恵	杯	連	1
南鎌治山遺跡	藤沢市		須恵	杯	連万	1
居村(B)遺跡	茅ヶ崎市			杯	連カ	1
馬越遺跡	加茂市	9C後-10C初	須恵	杯	連	1
水橋田伏遺跡	富山市	9C後半	土師	椀	連	1
宮ノ前第2遺跡	韮崎市	9C	土師	杯	連	2
水口町遺跡	熱海市	10C末-11C初頭	土師	杯	連／連	1
手原遺跡	栗東市	8C中頃	須恵	杯他	連	5
上石遺跡	豊岡市	8C後半-10C中頃	土師	杯	連	1
平城京左京二条二坊・三条二坊	奈良市	8C末	須恵	杯蓋	岡\岡\□\岡部\岡\介 岡連\□	1
西隆寺跡	奈良市	奈良	須恵	杯蓋	□\□\大連□\□(その他判読不能)	1
平城京右京八条一坊一坪	大和郡山市	奈良・平安	土師・須恵	杯・杯蓋	連	2
平城宮跡	奈良市		須恵	杯	物部連安万呂	1
石神遺跡	明日香村	7C後半	須恵	杯	物部連	1
周防國府跡	防府市	9C後半	須恵	杯	□(連カ達カ)殿	1

※明治大学日本古代学研究所「全国墨書き土器・刻書き土器・文字瓦横断検索データベース」を参考に作成